

## 認知的・情緒的共感とロールシャッハ・テストの 人間運動反応との関連

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科 角田 陽子

筑波大学心理学系 小川 俊樹

On the Relationship between cognitive/emotional empathy and human movement response of Rorschach test

Yoko Tsunoda and Toshiki Ogawa (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba, 305-8572, Japan*)

While Human Movement Responses (M) on the Rorschach Test are believed to be a reflection of a respondent's sense of empathy, it is not clear exactly what this empathy is and what mechanisms link M with empathy. Accordingly, the purpose of this study is to investigate the relations between M and cognitive/emotional empathy and the mechanisms underlying this relation. The Perspective-Taking Scale from the Interpersonal Reactivity Index (IRI) proposed by Davis (1983) was used as a scale of cognitive empathy, as this is correlated with the Empathic Concern Scale on the IRI, which measures sympathetic emotions. The Personal Distress Scale from the IRI, which measures emotional responses to sudden accidents, was used as a scale of emotional empathy. Rorschach protocols were compared from 27 students representing three empathy groups: (a) a perspective-taking group, with high perspective-taking and low personal-distress, (b) a personal-distress group, with low perspective-taking and high personal-distress, and (c) a high-high group, with both high perspective-taking and high personal-distress. The perspective-taking group provided significantly fewer M than both the personal-distress group and the high-high group. This suggests that M reflect emotional empathy, which is a self-orientated emotional response.

**Key words:** Rorschach Test, Empathy, human movement responses

### はじめに

ロールシャッハ・テストには人間運動反応（以下M反応）など被検者の共感性を反映するとされている指標がいくつか提唱されている。しかし、そこで意味されている共感性とは何であるか、またその指標が共感性を反映する機制はどのようなものであるかといった問題についていくつかの実証的な研究が行われてきたが、一致した見解は見られない。そこで、本研究では共感性の下位概念である認知的共感性と情緒的共感性の両面から、ロールシャッハ・

テストの共感性指標がどのような共感性を反映しているのかについて検討する。

人間には他者の感情を共有したり、理解したりする共感性という性質が生得的に備わっていると言われている (Plutchik, 1987; Davis, 1994)。心理学における従来の共感研究を概観すると、感情の共有や生起といった情緒的要素を重視する情緒的共感の研究と、他者理解という認知的過程を取り扱う認知的共感の研究が存在する。近年では、共感の概念を広く考え、認知的な側面と情緒的な側面の両方を含むものと定義する必要があるとし、両者の関係にも注

目すべきであると考えられている(菊池, 2002)。

情緒的共感性とは他者についての情動的な反応として共感を説明するものである。この定義は、怖がっている相手に出会って自分も恐怖を経験したり、喜んでいる相手に接して幸福感を感じたり、苦痛を感じている相手に接してある種の不快な情動が引き起こされたり同情が喚起されたりする現象を取り上げている。相手の感情とそれによって引き起こされる自分の感情が、一致する場合もしない場合も想定される。

認知的な過程として共感を説明する定義は、共感とはより積極的な試みであって、人が意図的で知的な努力をすることで、他人の「内側に」入っていったり、相手とつながりを持つとしたりすることであるとしている。その意味では、Piaget (1932) が提唱した「脱中心化」は、子供が日頃使っている自己中心的な考えから、他人にとって世界がどう見えるかを想像する認知過程への変化を強調している点で認知的共感性に近い概念である。

Hoffman (1987) は、共感の発達という考え方をもち、共感が喚起される様式には様々なものがあると論じた。Hoffman は、乳児期の共感は、となりの赤ん坊が泣き出すのを聞いて自分も泣き出してしまおうといった、自動的、無意図的なものであるが、認知能力や自他意識の発達に伴って、児童期後期には、他者の立場に立って他者の状況をより正確に想像し、他者の体験している苦痛を軽減したいという他者志向の共感が起こるようになる」と述べている。このように共感にも原始的、受動的で苦痛を自分のものと感じるものと、認知的、意図的で他者に対する思いやりを基盤としたものがあるという多面的な共感の発達理論を示した。

また、同じような考え方に Davis (1983) の定義がある。Davis は、共感がいくつかの別々の、しかしお互いに関連した構成概念からなるという考えをとり、共感の組織的モデルを提唱している。Davis は共感を「他人の経験についてある個人が抱く反応を扱う一組の構成概念」として広く定義し、他者の感情経験に直面した観察者が何らかの認知的・感情的ないし行動的な反応を出すに至る一連の出来事・エピソードとして捉えようとした。Davis は自身のモデルを元に対人反応性指標 (IRI) を開発した。それは、情緒的共感性として不幸な他人に対して同情やあわれみの感情を経験する傾向(共感的配慮)、他人の大変な苦痛に反応して、こちらが苦痛や不快の経験をする傾向(個人的苦痛)を、認知的共感性として日常生活で自発的に他人の心理的立場をとろうとする傾向(視点取得)、映画や小説に感情移入

する傾向(想像性)を測定するものである。

ロールシャッハ図版に人間が何らかの運動(動きや姿勢、表情など)をしているという反応を見る「人間運動反応(M反応)」を共感性の指標としてとらえる研究者は多い。M反応は共感性の他に、豊かな想像力、知的能力、自分の内面を安定させる能力など、一般に望ましい特性を反映する指標であると考えられている。

M反応と共感性の関係を最初に論じたとされる Bochner & Halpern (1945) は、M反応を「自分を他人の位置におく、あるいは、自分を異なった場面においてみる能力」と考えた。しかしそのような解釈の根拠となるものは指摘されていない。

この機制を考察した Schachtel (1966) は、運動反応は形態反応や色彩反応と違って、それに対応する客観的刺激がプロットに存在していない点を強調し、運動が投影される過程は被検者の共感性を前提にしなければ成立しないと考えた。Schachtel は、プロットに運動を知覚するのは、プロットを外側から観察するという態度ではなく、プロットの中で知覚した運動を自分の内部で体験しているという態度であると述べ、共感性を「知覚対象がどう動いているかを内面からわかっているという感じ(運動的共感)」と限定し、共感性を投影の一要素と見ている。

また、Piotrowski (1957) はM反応を多く生ずる人はM反応の少ない人に比べて、人間関係の複雑さをより鋭く認知すると述べており、認知的共感性の一つである認知的正確さに関連する解釈をしている。また、役割取得(role taking)を反映するものと想定しているが、その機制についてはあまり触れていない。

Klopfer (1954) や片口 (1987) も、M反応の解釈仮説として共感性を挙げている。「人間の姿をプロットの内に見る能力は、共感的な良い関係を持ちうる能力と関連がある」と述べているが、共感そのものを測定する適切な方法はないので、この仮説を直接吟味することは困難であるとしている。

Weiner (1998) は、適度な共感性を「自分自身を他人の立場に置き、彼らがどのように感じているかを正しく理解し、相互に関係する人々の行動や性質を理解するのを助けるもの」と定義し、正確な(accurate) M反応が2つ以上あることは適度な共感能力を示すとしている。そしてM反応の数が必ずしも共感性の高さを表すわけではなく、M反応の形態水準を重視し、M-反応が共感性の不全を示していると論じた。

高橋 (1996) は、以上のM反応の共感性解釈仮説について検討するために、Mehrabian & Epstein

(1972)の情動的共感性尺度(EES)の日本語版である加藤・高木(1980)の尺度の高得点群, 中得点群, 低得点群のM反応を中心とするロールシャッハ変数を比べる研究を行った。それによると中間得点群がM反応に関する変数(M反応数, M%など)において3群中もっとも高い値を示す傾向にあった。また, 調査対象者にIRIの視点取得尺度を実施しており, M反応とEES, 視点取得尺度の相関を調べたところでは,  $r=0.25$ ,  $r=0.34$ とそれぞれ低い相関があることが明らかになった。このことから, 情動的共感性の低い人はロールシャッハテストにおいても共感性が低いとされたが, 高い人よりも中間得点の人の方がM反応が多かったため, 質問紙で測定された共感性と, ロールシャッハテストで測定された共感性は等質のものではない可能性が考えられるとしている。そして, 認知的共感性とM反応の関係を考察し, 「高すぎる情動的共感性がロールシャッハテストの示すところの共感性を阻害している可能性があるのではないだろうか。またロールシャッハテストの示すところの共感性は, 認知的共感性と関連があるのではないかと述べている。

概観するとM反応が共感性を反映する機制として, 共感性の視点取得に近い「他者の視点で物事を見る」という能力を反映していると考えるか, 動きのある人間像を見て取ることによって「人への興味や親近感と想像する能力」を反映しているとするか, 二つの立場に分かれる。しかし高橋(1996)では, 情緒的共感性が低すぎないことや視点取得による認知的共感性が高いことがM反応の多さに結びついているという結果が出されており, M反応が共感性を反映するという理論の根拠は, 人間像への関心の高さや視点取得が示すような認知的共感性のどちらにも拠っていると考えられるとしている。Davisのモデルにおいても, 情緒的共感性にはそれに先行する認知的共感の過程が想定されており, 認知的共感性の視点取得と情緒的共感性の共感的配慮が下位尺度間でもっとも相関が強いとされている。他者に関心があり相手の立場に立って考える傾向が強ければ, 相手に同情的になったり配慮をしたりすることは自明であると考えたことで, M反応が情緒的共感性を反映すると明確な根拠がないまま信じられているが, そこには前提として視点取得という認知過程が先行することが必要であると思われる。M反応が共感性を反映する機制には情緒と認知の両面が関与していると考えられるが, 高橋(1996)の「高すぎる情緒的共感性がM反応の産出を阻害する」という考察に関しては, 視点取得という高次

の認知過程を阻害する低次の情緒反応があると考えることができよう。また, M反応が共感性を反映する根拠として他者への興味や親近感が考えられるのならば, M反応でなく, 運動を伴わないが人間像を知覚する「人間反応(H反応)」の方が関連を持つと考えることもできると思われる。M反応とH反応の共感性との関連の仕方を比べることで, M反応が共感性を反映する機制に示唆が与えられると思われる。

そこで, 本研究では認知的共感性として視点取得を, 情緒的共感性の中でも情緒的, 低次なものとして個人的苦痛を取り上げ, どちらか一方が高い者と両方が高い者としてM反応の産出にどのような違いが認められるかを検討する。視点取得は, Bochner & Halpern(1945)やPiotrowski(1957)が主張する「他者の視点に立って物事を見る能力」としての共感性を測っている。視点取得と共感的配慮は正の相関があるため, 視点取得の高い者は他者への同情も高いことになり, 他者に対する関心や親近感が高く, 情緒的に暖かい人柄を反映すると言えると思われる。個人的苦痛は, 「他人の大変な苦痛に反応して, こちらが苦痛や不快の経験をする傾向」であり, Davisの尺度では, 「突発的な出来事」を目撃した時に強く動揺するかどうかを尋ねることで測られている。高次の認知を必要としない情緒的な被影響性を測定するものであり, この得点が高い者は高橋(1996)のいう「高すぎる情緒的共感性」を持つと言えるのではないかと考えられる。

したがって, 視点取得が高く, 個人的苦痛が低い者は, 認知的共感によりM反応を多く産出すると思われる。また, 高すぎる情緒的共感による認知過程の阻害がないことにより, 視点取得, 個人的苦痛の両方が高い者よりもM反応が多くなる傾向があると思われる。

一方, 視点取得が低く, 個人的苦痛が高い者は相手の立場に立って考えることが少ないため, 認知的共感によるM反応が少なくなるであろう。また, 共感的配慮も低くなることが予想され, 人間反応自体が少ない可能性が考えられる。

視点取得が高く, 個人的苦痛も高い人は, M反応を産出する能力は持っているが, 情緒的共感性の高さがM反応の産出を阻害する可能性があるため, 人間像の知覚についてはその割合が低くなるようなことはないかもしれないが, M反応は相対的に少ないと考えられる。

また, 不良形態のM反応は共感性の不全を意味するというWeiner(1998)の指摘をふまえて, M反応の形態水準も考慮する必要があると考えられる。

## 方 法

### 調査対象者

茨城県内の国立T大学生398名(男性229名,女性167名,無記入2名).平均年齢は19.3歳(SD=1.70)で,年齢の範囲は18歳~37歳であった.

### 調査手続き

2003年10月下旬~2003年11月上旬に講義時間内に集団一斉調査で行った.一部は講義時間中に配布し,持ち帰って記入してもらい,翌週の講義時に回収した.回答を始める前に,本調査は今後行われる実験調査の参加者を選定するためにも行われるため連絡先を記入するよう依頼した.

### 調査内容

#### 共感性尺度(28項目)

Davis(1983)のInterpersonal Reactivity Index(IRI)の日本版(菊池,1999)を用いた.質問項目は28の短文からなり,4つの下位尺度「視点取得」「共感的配慮」「想像性」「個人的苦痛」各7項目に分かれる.本研究では「当てはまる」「やや当てはまる」「どちらともいえない」「あまり当てはまらない」「当てはまらない」の5段階評定で回答を求めた.

#### ロールシャッハテスト受検者の抽出

調査対象者全体における視点取得平均点より得点の高かった者を視点取得高群,低かった者を視点取得低群とした.

調査対象者全体における個人的苦痛得点の平均点より得点の高かった者を個人的苦痛高群,低かったものを個人的苦痛低群とした.

視点取得の高低,個人的苦痛の高低を組合せて4群を作り,視点取得が高く個人的苦痛が低い「視点群」,視点取得が低く個人的苦痛が高い「苦痛群」,視点取得も個人的苦痛も高い「両高群」の3群から被検者を選択した.

調査協力者として質問紙に連絡先を記入したのは,398名中95名(男性59名,女性36名)であった. $\chi^2$ 乗検定の結果,各群で連絡先を記入した人数に偏りは認められなかった( $\chi(3)=1.58, n.s.$ ).

#### ロールシャッハテストの実施

##### 受検者

上記の手続きにより選ばれた27名が参加した.各群の内訳は視点群(男性5名,女性6名),苦痛群(男性3名,女性5名),両高群(男性2名,女性6

名)であった.

#### ロールシャッハ・テスト手続き

調査対象者に個別にロールシャッハテストを施行した.手続き,スコアリングは片口法に従った.実施はすべて筆者が行い,スコアリングは筆者が行った後ロールシャッハテストに精通した大学院生2名のチェックを受け,スコアリングが異なった場合は3者で検討して一致したものを採用した.

仮説を検証するために以下の指標を使用した.また,視点取得と情緒性に関連すると思われる指標についても検討した.

①M反応:主M反応と副M反応の合計(副M反応は0.5個で計算)

Weiner(1998)は少なくとも2つ以上のM反応があることが共感的な他者理解を可能にするとしており,M反応は実数を比較した.

②M+:%:標準水準以上のM反応を総M反応数で割った値

主観的すぎて形態水準が低いM反応は,他者とのつながりを志向する共感性を正しく反映しているとは言えないと考えられるため,良形態のM反応が総M反応中どれくらいの割合となるかを算出することによって,M反応の形態水準を比較した.

③H%:人間反応の合計を総反応数で割った値  
対人関係への興味や関与を示すと言われているH%は,20~30%が程度の割合であるとされている.H%の値によって対人関係への興味の強さを比較した.

④通景反応(FK反応):主FK反応と副FK反応の合計(副FK反応は0.5個で計算)

FK反応は,客観視の能力を反映するとされており,視点取得能力との関連が推測される.

⑤色彩反応:形態色彩反応(FC反応)と色彩形態反応(CF反応)

色彩反応は被検者の情緒性及び情緒統制の度合いを反映するとされており,FC反応とCF反応に関して3群を比較することで,情緒の外的統制の強さを検討できると思われる.

## 結 果

#### ロールシャッハ変数の性差について

上記①~⑤と総反応数(R)において性差があるかどうかを検討するために,Mann-Whitneyの検定を行ったところ,反応数およびM反応において性差に有意傾向があり( $U=3.55; U=3.30, p <$

.10), 男性よりも女性の方が反応数, M 反応において中央値が高かった (Table 1).

### 3 群における共感的配慮得点, 想像性得点の差

3 群における IRI の各下位尺度の平均値を Table 2 に示す. 共感的配慮得点, 想像性得点を 3 群間で比較するため, Kruskal-Wallis の検定を行ったところ, 共感的配慮に 5% 水準で有意な差が認められた

Table 1 男女別のロールシャッハ変数の中央値および範囲

	男性 (N=10)		女性 (N=17)		U 値
	中央値	範囲	中央値	範囲	
R	19	10~48	32	16~48	3.55†
M	3.67	0~12	6.90	0~12	3.30†
M+%	64	0~100	49	29~86	n.s.
H%	31	0~60	25	8~52	n.s.
FK	0.75	0~2.5	0.83	0~4.5	n.s.
FC	1.67	0~3	1.91	0~7	n.s.
CF	1.12	0~6.5	1.92	0~6	n.s.

† . . . p < .10

( $H=8.58$ ,  $p < .05$ ). Bonferroni 法による多重比較を行った結果, 苦痛群は視点群, 両高群に比べ, 共感的配慮得点が低かった. 想像性得点に有意差は認められなかった ( $H=4.16$ , n.s.).

### 3 群とロールシャッハ指標の関連

3 群におけるロールシャッハ変数の中央値および範囲を Table 3 に示す.

#### ① M 反応

3 群間での M 反応の比較のため, Kruskal-Wallis の検定をおこなった. M 反応においては, 5% 水準で有意な差が認められた ( $H=10.88$ ,  $p < .05$ ). Bonferroni 法による多重比較を行った結果, 視点群の中央値が苦痛群, 両高群の中央値に比べ低かった.

#### ② M+%

M+% に関しては有意な差が認められなかった ( $H=1.99$ , n.s.).

#### ③ H%

3 群間での H% の比較のため, Kruskal-Wallis の検定を行ったところ, 5% 水準で有意差が認められた ( $H=6.56$ ,  $p < .05$ ). Bonferroni 法による多重

Table 2 各群における IRI の平均, 標準偏差および中央値

	視点群 (N=11)		苦痛群 (N=8)		両高群 (N=8)		H
	M (SD)	中央値	M (SD)	中央値	M (SD)	中央値	
視点取得	26.2(2.93)	26.33	18.4 (3.54)	19.75	26.6(3.50)	26.33	14.91**
個人的苦痛	19.5(2.30)	19.50	25.1 (2.03)	25.00	26.1(3.31)	25.33	19.10**
共感的配慮	28.6(1.86)	28.50	24.6 (2.61)	25.00	28.4(3.78)	29.00	8.58*
想像性	24.5(5.61)	25.00	21.8 (5.87)	22.00	27.7(4.23)	28.00	n.s.

\* . . . p < .05  
\*\* . . . p < .01

Table 3 各群におけるロールシャッハ変数の中央値および範囲

	視点群 (N=11)		苦痛群 (N=8)		両高群 (N=8)		H
	中央値	範囲	中央値	範囲	中央値	範囲	
R	27	10~46	29	14~48	29	13~45	n.s.
M	3	0~7	8.5	2~12	6.5	3~12	10.98*
M+%	61	46~100	50	33~100	45	0~71	n.s.
H%	18	0~60	39	23~52	29	15~50	6.56*
FK	1	0~4.5	0.75	0~2.5	0.75	0~3	n.s.
FC	1	0~4.5	1.5	0~7	2.25	1.5~6	n.s.
CF	3	0~6.5	1.5	0~2	1.5	0.5~6	n.s.

\* . . . p < .05

比較を行った結果、視点群は苦痛群に比べて、人間反応の割合が低かった。両高群は他の2群と差がなかった。

#### ④ FK 反応 ⑤ 色彩反応

3群間でのFK反応、色彩反応の比較のため、Kruskal-Wallisの検定をおこなった。FK反応、FC反応、CF反応のいずれにも有意な差は認められなかった ( $H=3.31$ ,  $H=1.19$ ,  $H=0.97$ , n.s.)。

### 考 察

認知的共感性と情緒的共感性が相互に関連することを予想し、認知的共感が特徴的な群と情緒的共感が特徴的な群、認知的共感と情緒的共感のいずれも高い群を設定し、3群間でのロールシャッハ指標の比較を試みた。その結果、相手の視点に立って考えることをよくし、他者に対して同情的である視点群が、他者と接することで自己志向的な感情反応をしやすい苦痛群や、相手の視点に立って考えることをよくし、他者に対して同情的であるが同時に他者と接することで自己志向的な感情反応をしやすい両高群よりもM反応が少なく、M反応に関する仮説は支持されなかった。これは、M反応と視点取得とに正の相関があった高橋(1996)の研究と正反対の結果である。片口(1987)によると一般成人のM反応の平均は3.6となっている。視点群の平均2.9、中央値3は片口(1987)のデータに近いが、M反応が0~3と一般成人と比べても少ないケースが全体の半数を占める。また、本研究の対象が大学生であることを考慮すると、経験的には多くのM反応を出すことが期待される。各群ごとの特徴を見ていくと、視点群のM反応の最頻値は0であり、最大値でも7とあまり多くない。一方、苦痛群の最頻値は12であり、これが最大値でもある。一人をのぞいた全ケースで6以上のM反応を出している。良形態のM反応の割合にも差はなく、この結果を見る限り、M反応と共感性の関連としては視点取得傾向よりも個人的苦痛の方が関連が強いと考えざるを得ない。そして、視点群は情緒的共感性の中心的概念である共感的配慮得点が全体平均よりも高かったが、これもM反応の産出へとは結びかなかつたと考えられる。

M反応はもともと主観的に物事を見る傾向を反映すると言われる。想像力の高さとの関連は様々な研究から明らかにされている。積極的に想像を働かせるという点では視点取得の能動性と共通するのではないかと考えられるが、視点取得という行為は、「自分だったらどう見るか、どう感じるか」という

主観的な見方ではなく、「相手がどう見ているか、どう感じているだろうか」と、自分の見方を捨てある程度客観的な見方をしなければ出来ないことであり、M反応の主観性とは矛盾することでもあり考えられる。自分が相手の立場に立つ、ということに投影や自己中心的な想像の要素が含まれることは否めないが、IRIの視点取得で測定されるものは、投影よりも、公平・公正な判断のための相手の視点を借りた「客観視」の能力や傾向であると思われる。この点から客観的な視点取得と主観的なM反応はつながらない結果となったのではないかと考えられる。

M反応に反映するとされる共感性は、視点取得能力ではなく、それよりも主観的・情緒的な色合いの強い、自己志向的な共感反応なのではないかと推測される。M反応で示される共感性は、視点を自分から切り離すという認知的行為ではなく、相手のことを自分のことのように感じるという、より自己と他者の区別があいまいな状態なのではないかと考えられ、共感性の中でも相手との一体感を伴う情緒的・運動的なものであると考えられる。

片口(1987)では、M反応は知能、想像力、内的安定性、共感性など一般的に人格の望ましい特性と関係があるとされるが、Mが多すぎる場合(10以上)、あまりに内向的で現実に適応しにくい、空想的・現実逃避的な人柄を予想できると述べている。このことから、M反応も多ければ多い方が適応が良いわけではないといえる。苦痛群ではMが10を上回ったケースが3つあった。2次元のインクのシミに人間像と運動を見て取る主観性は高すぎる場合にもまた問題となると思われる。個人的苦痛が意味する感情反応の強さは相手の苦痛も自分の苦痛のように感じてしまうという自他の区別があいまいなこと、他者との距離がとれず近づきすぎてしまっていることと関連していると考え、個人的苦痛の高い人はロールシャッハという未知の課題に対しても距離をとって警戒し自分をさらけ出さないようにするということがなく、自分の見方(主観的な見方)を素直に表現する傾向があると言えるのではないだろうか。

一方、両高群では10以上産出したケースが2ケースあったが、M反応の中央値は全体での中央値6に一番近く(両高群の中央値6.5)、適度な量のM反応を出していると言えよう。主観的になりすぎず、かつ客観的になりすぎないためには、情緒的な特性と認知的な特性の両方をバランス良く持つことが必要と考えられる。

H%については、M反応と同じ傾向を示し、視

点群で少なく、苦痛群で多いという結果となった。両高群は2群の得点の中間に位置し、どちらの群とも差がなかった。視点群の中央値は18であり、苦痛群の中央値は39と2倍の差があったが、視点群の値の範囲は0~60と幅広かった。一般成人のH%の値はだいたい20~30%となることを考えると、H%に反映されるような対人関係への興味関心は、視点群の中でも非常に高い人ともいれば非常に低い人もいるということとなる。他者への興味関心が強いことと日常的に相手の視点に立って物事を見ることとの間には強い関連はなく、視点取得尺度が「相手寄りの認知をする傾向」だけでなく「自分や相手から一歩離れた認知をする傾向」をも測定しているということを示していると思われる。

### まとめ

本研究では、M反応などの共感性に関する指標において特徴的であろうと考えられた3群を設定し、被検者を選択したが、3群間において差が認められた指標はM反応、M%、H%など、人間反応に関連するものだけであり、いずれの指標においても視点群が苦痛群よりも低い値を示していた。このことから、M反応が反映しているのは、個人的苦痛のような、相手のことも自分のことのように感じる傾向としての共感性であり、視点取得は客観的に物事を見ようとする性質を持つためにM反応には結びつかないのではないかと考察された。苦痛群にはMが多すぎると思われるケースもあり、苦痛群のM反応が必ずしも肯定的な意味合いだけを持つとは言えないと考えられた。

視点群の客観性を保証するであろうFK反応や、苦痛群の感情反応を反映する色彩反応など、他の代表的なロールシャッハ指標に関してはいずれも3群における差は認められなかった。共感性に関するロールシャッハ指標はやはりM反応であることが確認されたと言えるが、その意味するところについては、Schachtel (1966) が述べた「運動的共感」に近いものであると考えられた。Schachtel (1966) が「運動的共感」を投影の要素であると述べているのと同様、M反応が出されるということ自体がすでにプロットの刺激に対して受動的なだけでなく、能動的に想像を働かせていることでもある。個人的苦痛は受動的な感情的被影響性の高さを測ると思われているが、M反応との関連が見られたことで、そこに積極的に相手に自己を投影する姿勢が含まれていると言えるのかもしれない。

共感を広く捉える定義には、共感の認知過程と共

感の結果として起こる情緒的反応の両方が含まれるが、M反応を基に共感性について解釈する場合にも、単に共感性というだけでなく、その意味するところをよく吟味する必要があると思われる。

本研究では、M反応に性差が認められ、男性よりも女性の方がM反応が多い傾向が認められた。群によって男女の人数が異なっているため性差が結果に影響している可能性があることも否定できない。その点では性差の影響を検討するために被検者数を増やしてさらなる研究をすることが必要である。

### 引用文献

- Bochner, R. & Halpern, F. 1945 *The clinical application of the Rorschach test*. New York: Grune & Stratton.
- Davis, M.H. 1983 Measuring individual differences in empathy: evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44 (1). 113-126
- マーク H. デイヴィス 菊池章夫 (訳) 1999 共感の社会心理学 川島書店  
(Davis, M.H. 1994 *Empathy: a social psychological approach*. Westview Press.)
- Hoffman, M.L. 1987 The contribution of empathy to justice and moral judgement. In N. Eisenberg & J. Strayer (Eds), *Empathy and its development*. New York: Cambridge University Press. Pp.47-80.
- 片口安史 1987 改訂新心理診断法 金子書房
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究 2, 33-42.
- 菊池章夫 2002 共感研究の問題点 日本教育心理学会大会発表論文集 pp.53.
- Klopfer, B., Ainsworth, M.D., Klopfer, W.G. & Holt, R.R. 1954 *Developments in the Rorschach technique*. New York: World Book.
- Mehrabian, A. & Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40, 525-543.
- ピアジェ, J. 大伴 茂 (訳) 1957 「児童道徳判断の発達」 同文書院  
(Piaget, J. 1932 *The moral judgement of the child*.)
- ピオトロフスキー Z.A. 上芝功博 (訳) 1980 知覚分析—ロールシャッハ法の体系的展開 新曜社  
(Piotrowski, Z.A. 1957 *Perceptanalysis: a fundamentally reworked, expanded and systematized*

- Rorschach method*. New York: Macmillan.)
- Plutchik, R. 1987 Evolutionary bases of empathy. In N. Eisenberg & J. Strayer (Eds), *Empathy and its development*. New York: Cambridge University Press.
- シャハテル E.G. 空井健三・上芝功博 (訳) 1975 ロールシャッハ・テストの体験的基礎 みすず書房 (Schachtel, E.G. 1966 *Experiential foundation of Rorschach's test*. New York: Basic Books.)
- 高橋久美 1996 共感性とロールシャッハ・テストの人間運動反応との関連について ロールシャッハ研究 XXXVIII, 99-112.
- Weiner, I.B. 1998 *Principles of Rorschach interpretation*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. (受稿9月28日: 受理11月17日)